TOMORROW 21
東芝技術展

ディジタル社会の夢と課題

Visions and Objectives for the Digital Society

コーディネーター
野中ともよ氏

いま日本と世界は大変革の中にあります。しかし，変革の中にいる私たちにとっては，その具体像はなかなか見えにくいのも事実です。ジャーナリズム，デザイン史，経済学，エレクトロニクスという，それぞれ立場の違う4人の知性のディスカッションを通じて，いま起こっている変革の実像，夢，課題を浮き彫りにします。

親や祖父母がいた時代とは違うところへ来ている

野中　今日はおよそ1時間という大変短い時間しかございませんが，『ディジタル社会の夢と課題』ということで楽しいお話し合いを通じて，決してコムズカシイことではなく，皆さまが何がしかのヒントをお持ち帰りいただけるようなものにしたいなと思っています。このメンバーですから，すばらしいお話を伺えることを私自身もたいへん楽しみに参加させていただきました。

まず田中さん。先ほどの特別講演を伺っていて，「変化への対応を自分で決められないな」と感じてマーケティングリサーチに頼ってしまう経営者は，「ま，やめたほうがいいですね，はい失礼します」ということで最後がとてもインパクトが強かったんですけれども，そういう方はどうしたらいいんでしょう(笑)。

田中　いま21世紀の入り口に立とうとしているわけですが，突然地球が狭くなって，地球で起きていることがダイレクトに自分の生活にも，自分の経済活動にも影響を与えるということがだんだん実感されてきた。

我々の親や祖父母がいた時代とは違うところへ来ていると思いますね。

野中　ありがとうございます。柏木さんはご自身としてもコンピューターと格闘して，直して，けんかして，蹴飛ばして，という“歴史”をおもちと伺っていますが，まず個人としてパソコンとはどれくらいのお付き合いですか。

柏木　12，3年くらいになりますかね。パソコンを使って原稿を書いたり，メモをつくったりしているわけですけれども，この間に一番変わったのは，記憶を全部そこに預けられるという気持ちが非常に強くなってきているということですね。ある領域についてだけですけれども。

逆に言えば，それを自分で頑張って記憶していなくてもいいんだという日常生活になってくる。これは怖い部分もあるし，おもしろい部分でもありますよね。

野中　助かっているなという，そのプラスの部分は具体的には?

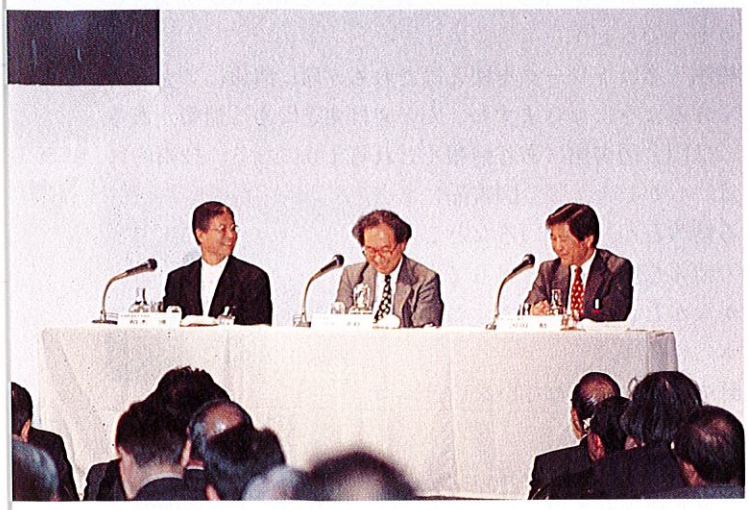
柏木　思考の仕方が今までと全然違ってきたという感じはありますね。

僕はデザイン史が専門なんですけど，自分がデザイン史に関するある問題について10年前に書いたデータを呼び出してきて，新しい文献を調べて，読んで，書く。そのときに，どこが違っているのかというのも非常に検討しやすいですね。これ，自分の頭の中に全部入れておくなんてことはとてもできないわけですよね。

野中　活字や原稿用紙だと持ってきて広げてという，その時間を費やしている間に自分のスパークしていく思考が消えてしまうというイライラ感がありますね。

柏木　ありますね。ですから，記憶と思考することというのは，わりと今まではリンクしていたわけですね。ディジタル技術ではとりあえず記憶しておくところだけは，ある程度分離できる。

そうすると，思考して，それをエディットして，組み合わせてモノをつくっていくところだけをかなり意識して担当



パネリスト
柏木　博　氏
田中直毅　氏
河田　勉　氏

すればいいという形になるわけですけど，逆に言うと，そのことによってある能力が非常に低下することも事実ですね。

ビジネスの新しい切り口がブレイクスルーを生む

田中　産業界では情報技術の発展の中で，従来の産業の切り口を全く変える人が出てきました。シティバンクという銀行が，もう今から15年ぐらい前でしょうか，突然のようにコンピュータ技術者とか，衛星通信とか，そういう人をやたら雇い始めたんですね。

当時，日本の銀行は何をやっていたかというと，預金者の年齢も銀行は把握していない時代があったんですね。本来お客なのに全くわからない時代がずっとあったんです。

そのときにシティバンクはものすごい情報投資を行うことによってオートローンとか，住宅ローンとか，要するに耐久消費財とか，住宅を売るときにどういう特性を持った人ならば，どういう条件でローンをつけられるか。その判定基準がすぐ，まあ非常に極端に言えば，瞬時といいますか，１人１人の顧客をちゃんと管理して，いろいろなジャンル分けができれば，自動車ローンというのはすぐ，この条件でパッと売れるんですね。もうセールスなんです。このやり方でシティバンクは世界中で成功しました。

こういうのを見ていますと，銀行業というのもものすごく変わってきたな，銀行業の奥行きがこれだけあるということを示しているんだなと思ったわけです。

つまり従来とは違う切り口で現実にチャレンジする人というものが情報の発信源なんですね。従来の考え方から自分自身を解放して，違う切り口で問題をほぐしたり，新しい問題点をだれにもわかるように見せてみたりということが影響を持つ。主役が国家ではなくて，チャレンジしている主体――個人であれ，銀行であれ，事業会社であれ――チャレンジしている主体の影響，波を我々はかぶっています。できるものなら，かぶるばかりではなくてね…。

野中　みずからブレークスルーしたい。

田中　波を起こして，向こうへやってみたいものだということですよね。もし，それが的確なものならば，かなり先まで行くぞという予感は皆にあるんじゃないでしょうか。

人が自由に，安心して活動できるディジタル社会のつくる責任

野中　個人が開放されて，やりたいと思えばできるようになってきたという背景に技術の進歩があったと思うのですが，そういう意味で技術をいかに使いこなすかが大きな鍵にもなってくると思うんです。技術の河田さんからご覧になるとどうでしょうか。

河田　ディジタルと，開放とか社会の問題ということでは，今一番話題になっているインターネットを取り上げて説明するとわかりやすいと思います。机の上にポツンと置かれていたパーソナル コンピュータに電話線で代表されるネットワークというのがある日ついたわけです。

そこに，ワールド ワイド ウェブという仕組みをつくった結果，自分がワードプロセッサでつくった文章なり絵なりが同時に世界に発信できるようになりました。これまであった伝達のための制約とか条件を飛び越して，自分の情報を今まで考えられなかったレベルの人に瞬間的に開放することができるわけです。

野中　国境も超えるし，ある手続きをとれば，向こうのほうにあった情報を自分のところにダウンロードできて，自分もそれを所有することができて，ということですね。

河田　そうですね。ですから，これからはインターネットの環境の中でどういうサービスを発明するかですね。コンビニエンス ストアというシステムを発明して，便利な生活ができたように…。

野中　流通革命をしたように。

河田　インターネットで次に何を発明するか。いわゆる発明，発見の海が広がったと言えます。そういう意味ではディジタル社会は，インターネットで言えば今すでに21世紀は始まっていると思います。

野中　インターネットは，国境も超えてしまうし，いろいろな規制も超えているし，今，電子マネーが実用化されればマネーのコンセプトも変えてしまう。3,000万円あれば放送局長というお話がありましたが，ネットワークでバンカーにもなれてしまうわけですね。技術者としては，こうした状況をどのように見ていらっしゃるわけですか。

河田　いま一番大事だと思っているのは皆さんが活動するために必要な“仕組み”をきちんとつくり上げることだと思います。ネットワークに質の高いと思うものがあったら正当な対価を払わないと正常な社会はできません。先ほどの電子マネーがいい例ですが，世界全体が共有できる安全な仕組みというのが必要だと思うんですね。

私個人もそうなんですけれども，コンピュータに自分のクレジット番号を打ち込む瞬間は非常な緊張と，何が起こるかわからないと，皆さん恐れを抱くと思うんです。電子メールでプライベートな情報を送ることにしても同じです。情報の経路としてのネットワークを安全で安心できるものにする。これができないと新しい時代が機能しないのではないでしょうか。世界中で数学理論などを駆使して，いまその整備を急いでいるところです。

“開放”されてみて初めて日本の閉鎖性に気づく

野中　かつてのアメリカの国防の中心的存在だったナイさんが，核の傘から情報の傘を志向する国家戦略が始まっているのだという発言をずいぶん前になさった記憶がありますけれども，今，夢の世界には，必ず光と影があるというようなお話にも移ってきたように思います。思い切って，その夢の部分をもう少し膨らませてみたいと思います。柏木さんディジタル ネットワーク社会ではどんな夢が現実となりそうでしょう。

柏木　ネットワークを使えばだれもが同じ情報にアクセスできるようになりますね。たとえば東芝にある情報，あるいは国会図書館にある情報をとれるようになる。技術的には。しかし今，国会図書館にある情報とか，いろいろなところの情報を開けようと思ってもなかなかとれないわけですね，日本の場合は。

野中　開放がされていないという意味で。

柏木　開放されていないわけですよ。つまり，それはディジタル化される以前に，我々のほうの社会に大きな問題があるんです。

野中　それは言い方を変えれば，日本は，例えば図書館にパワーがあるというのは，情報を囲い込んでいるから，人々はそこへ足を運ばなければいけないわけだし，手続きをとらなければならない。霞が関などはそれの冠たるものだと思うんですね。アメリカの場合，これはオープンにしなきゃいけないよという形で国が政策として情報公開の原則を貫く。そうしたことをきちんと手当てしてあるから，情報は共有されていくわけですね。河田さんたちが作ってくれたネットワークを使って，いざ情報のある場所に行ってみたら初めて日本がひどい国だということを認識する。初めて，気がつくわけですね。

柏木　そうですね。

野中　それで今，扉を開けろという運動がブワーッと盛り上がっているということでしょうね。

柏木　小さな端末を手に入れたことによって，日本の社会の情報の封鎖性みたいなものに気がついた。これをこじ開けて開放できると，先ほど夢と言いましたけれども，もうちょっと違った社会が始まるんじゃないか，それが一つの夢になると思うんです。

国家間の問題で言えば，情報がリッチな国と情報がプアな国の格差が非常に開いてきて，この問題を何か手当てしていかなくちゃいけない。

野中ともよ 氏――コーディネーター兼スピーカー
Tomoyo Nonaka

上智大学大学院新聞学博士前期課程修了。1977年から1年間米国ミズーリ コロンビア大学に留学しフォトジャーナリズムを専攻。1979年からNHK「海外ウィークリー」「サンデースポーツスペシャル」，1992年からテレビ東京「ワールド ビジネス サテライト」の番組キャスターを務めた。中京女子大学コミュニケーション研究所客員教授。大蔵省財政制度審議会，他委員。著訳書は『ガンバレ，自分！』『アイアン ジョンの魂』ほか。

柏木　博 氏――スピーカー
Hiroshi Kashiwagi

1946年に神戸市で生まれる。70年武蔵野美術大学卒業後，当初，編集者として活動。映像・広告・写真に関心を持ち，家具，電気製品，映画，テレビなど具体的なものを通して，同時代の生活の意識，感覚を考える作業を続ける。83年東京造形大学助教授となり，平成3年教授。のち武蔵野美術大学教授。著書に『近代日本の産業デザイン思想』『日用品のデザイン思想』『芸術の複製技術時代』『デザインの20世紀』『家事の政治学』『世紀末の未来都市』『肖像のなかの権力』『ミクロユートピアの家族』『電子デザインの詩学』など。

日本発のデファクト スタンダードをつくる

野中　まさに,日本に住むわれわれ自身が取り残されていく状況というのがあると思うんですね。情報があっても,それはまだ一部の手におさめられている。これは私たちにとってとんでもない未来につながってしまう。それを今こじ開けておかないといけない…。

私も，例えば電気通信審議会とか，財政審議会のメンバーをやらせていただいているのですが，霞が関の方には危機感がない，はっきり言って。1年前のことになりますが，さる委員会で，「インターネットってやつがずいぶんはやっているらしいけれども，それじゃあ4つほど買って来い」と部下に命令しましたという方がまじめにお役所サイドに座っていらっしゃるんです。このようなことで国策としての日本丸，大丈夫なのかなという危機感もあるんですけれども，技術で世界と競争されている河田さん，そのあたり，いかがですか。

河田　インターネットの世界だと日本は厳しいと思いますね。デファクト スタンダードというものが世の中を覆っているわけです。残念ながら，多くのデファクト スタンダードは米国発信のものです。

野中　今日おいでの方には釈迦に説法だと思いますが，デファクト スタンダードというのは，ある技術開発がなされたときに，それが世界をリードするというか，知的所有権を握っていくということですね。

河田　そうですね。でも逆立ちしてもアメリカが勝てないコンテンツというのは，私個人では2つあると思うんです。1つは，コミックス，いわゆる漫画ですね。日本の漫画のほうが楽しいということで，アメリカの子供たちは日本のものを読んでいますね。それにアニメーション。一部の洗練されたディズニーのアニメーションというのは確かに世界を席巻していますけれども，日本のアニメーションはやはり優れています。

2番目はゲームソフトですね。この面でははっきり言って，デファクト スタンダードです，任天堂とプレイステーションとか，セガというのは。残念ながら東芝の製品ではございませんけれども。

野中　今，同っていいものかどうかドキドキしていたんですが(笑)。

河田　この2つは日本がデファクト スタンダードですね。東芝のラップトップ コンピュータというのは，それに匹敵するぐらい，世界のメジャーなものです。それも世界標準の技術を使ってそこに東芝らしい小型化や省エネルギーなどの技術を詰め込んできたからこそ，メジャーになれたんだと思います。オープンな場での競争でデファクト スタンダードをとっていくことですね。我々技術者は自分の信念で一番のもの，世界の方に楽しんでもらえるものを東芝では目指しています。その中からすばらしいものがきっと出てくると信じています。

東芝は総合電機の意味から変えていく

野中　きょうは東芝を背負った形で出席をしていただいているんですが，恐縮ですが“社長に代わって”お話いただくと…。

河田　例えば総合電機という概念も変わると思います。何でも売っているところではなくて，社会に役立つ最先端技術だけを総合的にそろえた会社というように，先端技術だけを総合的に持っている企業ですね。自分たちも先端技術を持っていて，でも自分たちにない先端技術があれば，オープンにどことでも組んでいく。これが“総合”の意味だと思います。東芝は日本を代表する企業として最先端を総合することで楽しみと快適さ,それから,環境的な快適さを作り出していく。それが日本と世界を良くしていくということについて，私たちができることではないでしょうか。

野中　ありがとうございます。ほんとうに時間がなくなっ

田中直毅 氏――スピーカー
Naoki Tanaka

1945年愛知県に生まれる。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了後，国民経済研究協会主任研究員を経て，経済評論家に転身。現場へ行って情報収集を行う，行動派エコノミストとして活躍。規制緩和などについて積極的に提言している。86年の衆参同日選挙の時には「自民党＝保守二党論」を展開して注目される。著書は『日本政治の構想』,『新しい産業社会の構想』で17回石橋湛山賞,『最後の十年　日本経済の構想』で92年度吉野作造賞。

河田　勉――スピーカー
Tsutomu Kawada

1946年に福岡県に生まれる。71年九州大学工学部修士課程修了。同年東芝に入社。78年日本初の日本語ワードプロセッサのかな漢字変換ソフトのプログラミングを担当。後に機械翻訳プロジェクトリーダー，ヒューマン インタフェースの研究を経て情報システム研究所所長。93年Advanced-I 事業本部，95年情報サービス・機器開発室。現在は Advanced-I 事業本部のIP事業推進室長。携帯端末の開発，情報フィルタリング技術開発に従事。

てしまいました。柏木さん，電子社会というものの持つ光と影の部分で，どういうふうにそのマイナスが出てきて，それをヘッジするためにどういう心構え，あるいは手当てが必要なのかということを簡単にお話しいただけますか。

ディジタルネットワークの中での新しいルールが必要

柏木　極めて重要なことは，これまでの新聞や雑誌やテレビという近代的なメディアというのは，そこで何かが発信された場合に，それは決定的なことを言っているのではなくて，ある種の意見を述べているわけです。真実ではなく意見だと。そして意見である以上，それに対する反論も許されている。これは近代的な社会のルールだったわけですけれども，現在の電子メディアの中では，恐らくそういったルールというのがなくなってしまっている。

社会が壊れているのと同じで，ディジタルネットワークの中にルールがまだなくて，ここで発信されたものが意見ではなく，あたかも真実であるかのように流れてしまう可能性があるんです。この状況の中で，誹謗中傷などいろいろなことがすでに起こっています。これまでのメディアとは違う“メディアに乗ったことは真実”という感覚やそこから起こる問題が，今度はテレビや雑誌や新聞という既存のメディアに逆流してしまうという危険性もあるわけです。ですから，ネットワークでの発言のルールを確立するということは，ひとつ相当認識しておかなければいけないだろうということがあると思います。

“評価基準”づくりと評価のできる人材育成がカギ

野中　ありがとうございました。田中さん，最後の締めをおねがいします。

田中　僕は日本社会で鍛えなきゃいけないのは，とにかくある種の評価をする職種をつくろうということなんですね。暫定的であれ，とにかく評価基準をつくり，それに従って評価する人をつくる。どれもこれもだいたいうまくいかないんですから，また，その評価の仕組みを見直す。とにかく評価にかかわるアクティビティをもっと本気で考えないと情報化社会に合うように人も組織もシフトさせられないのです。「評価って，そんなに難しいことなんかできるわけないだろう。結果が出るまで待てよ」という意見もあると思いますが，結果が出るまで待っているというのは，こういう情勢の中では何もしないということにつながりやすいですからね。だから，暫定的な評価をしてでも前に進むということをしないと，私は，情報化社会の先陣は切れないと思うんです。

野中　質問させてください。例えば具体的なイメージとして，広告代理店とか，マーケティングの会社とか，証券系のシンクタンクとか，うちに任せてください，評価しましょうという，そういう方は今でも目に浮かぶんですが，田中さんのおっしゃる評価できる人材とか，システムというのはどういうイメージですか。

田中　アナリストとかファンド マネージャーもあるでしょう。でもそれだけではないですよ。情報担当の役員は情報にかかわって，どういう評価基準をつくって，そこにどういう資源を充てるかという枠組みをつくる人でなければなりません。それなのに「評価というややこしい話は困るよ。間違いがあったら，おれが責任をとるのか」という体質があれば，評価なんかだれだってしたくない。将来というわからないことに基準をつくって，できることからやっていく。責任のとりようもつくっていく。企業の中にそういうセクションをつくって，ちゃんと評価してマネージでき，リスクをマネージしたところは，成功する確率が非常に高い。そうでないところは最初から出発点に並んでいないということでしょうね。

野中　『ディジタル社会の夢と課題』というテーマで1時間ちょっとにわたって，お三方にお話を進めていただきました。一つ安心したのは，先行きというのは誰もわからないんだということ。そして今までの切り口，今までのノウハウではダメだということ。この2つが分かったことです。

つまり，いっちょうやってみるかと思う気持ち。これが大事なのだ，ということ。しかも，それをかなりリスクをとれるリーダーのもとで，「勇将のもとに弱卒なし」といいますけれども，みんな弱卒なんだから，メディアのことについてはわからないんだから，それじゃあ，最後の責任は俺がとってやるという方がいらっしゃれば，その企業が，企業組織としては随分パワーを持ちそうだということです。そして，今後その可能性を支えてくれているのが，今日皆さまの前にごらんいただくことのできるディジタルテクノロジーとネットワーク ソサエティだと思います。

平成不況というパンチを受けましたけれども，こういう時代に生まれてよかったなと思ったほうが勝ちではないでしょうか。

今日のお話が皆様の今後の企業活動，あるいは個人の生活にヒントになればというのが私の願いでもあります。ご清聴ありがとうございました。そして，お三方の先生，ありがとうございました。